－所蔵作品紹介－

戸谷　成雄　TOYA Shigeo

森

もり

作品データはこちら

戸谷成雄（1947～）は、現在、日本で最も関心を集めている木の造形作家の一人である。彼は長野県生まれで、愛知県立芸術大学で彫刻を学んでいた1970年代半ば頃から作家として活動を始めた。80年代に入るとその活動は次第に注目されはじめ、国内外の数々の企画展などに出品、1988年には朝倉文夫賞を受賞した。

彼がデビューした1970年代は、彫り刻むという文字通りの意味での彫刻の概念の解体が叫ばれた時代である。しかし、彼は、当時の風潮に影響をうけつつも、彫刻表現を石膏などの素材に試み続けた。

1984年に始まる「森」シリーズは、彼がはじめて木という素材の彫刻的表現に取り組んだものであり、図版の作品もその中の一点である。米ツガの木材をチェンソーで切り刻み、灰とアクリル絵具を混ぜて塗るという方法で制作されている。作者自身は、緑豊かな森ではなく、死して廃墟と化した森を発掘しているのが自分の作である、という意味のことを言っている。「森」というのは単に自然を意味するだけではなく、都市など営々と築かれてきた文明をも内包する幅広い意味で使われているのだろう。荒々しく彫り刻まれ、ごつごつと灰褐色を呈して屹立する作品の肌を通して、そうした象徴性を内在させた強固な造形が浮かび上がってくる。

旭川美術館だより「氷華」No.28（1992.１発行）「収蔵作品から」より